北海道災害支援多言語サポーター募集

HIECCでは、災害時に正確で最新の情報を届けるなど
被災した外国人を「言語面」でサポートするサポーターを募集しています。

どのような活動を？

被災地の依頼に基づいて、被災地の自治体の職員またはHIECC職員と協力して、

- 外国人被災者のいる避難所を巡回、通訳などをする
- 災害対策本部などから発表された情報の翻訳をする

サポーター活動に対する報酬はありませんが、移動に際しての交通費は支給されます。
平時には当センターが行う研修会や避難訓練に参加して研修などをします。

どのような資格が？

- 実用会話が可能なレベルの語学力を持つ方
- 北海道在住の20歳以上の方（国籍は問いません）

登録申込先・お問合せ

公益社団法人 北海道国際交流・協力総合センター（HIECC／ハイエック）へ申込書を送って下さい。
※申込書はこちらからダウンロードできます。
URL　http://www.hiecc.or.jp

060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目
道庁別館12階　HIECC交流部
TEL：011-221-7840　FAX：011-221-7845
Email：exch@hiecc.or.jp

とかちから発信！国際交流　国際フェスタ in 十勝 2012

2月4日（土）、5日（日）にJR帯広駅南側のとかちプラザ1階アトリウムで開催された。このイベントは、十勝管内の国際交流団体の活動を展示、紹介したり、外国人とのコミュニケーションを通して、異文化に触れてみようと毎年開催されている。

パネルと民芸品展示、クイズラリー、そして今年は外国のおやつ試食コーナーを設けた。各国の国旗の塗り絵やバレンタインカードを手作りするコーナー、また世界の絵本コーナー等には子どもたちが集まっていた。両日とも、ベトナム、ケニア、タイ、フィリピン、中国、ミャンマー、ブラジルなどから帯広畜産大学に留学中のみなさんがステージで自国紹介をして会場を盛り上げた。

十勝インターナショナル協会（事務局：森の交流館・十勝）の主催で、（独行）国際協力機構帯広国際センター（JICA）と（公社）北海道国際交流・協力総合センター（HIECC）が共催した。「十勝インターナショナル協会」は十勝地域の国際化を進めるとともに、世界の人・もの・情報が行き交う、世界に開かれた地域づくりをめざし、平成8年に十勝管内市町村、民間の国際交流団体等により設立された任意団体で、①国際化施策の相談、支援、連絡調整、②十勝に住む外国人への情報提供、③国際交流事業・協力事業の企画、実施、支援活動、④ボランティア組織の育成と組織化、⑤開発途上国への援助、協力支援など幅広く活動している。

LIBRARY INFORMATION　JICA札幌図書室

JICA札幌図書室

国際協力、開発途上国に関する図書を中心に、和書、洋書、併せて約9,800点の資料を所蔵しております。図書の所蔵に関するご質問など、どうぞお気軽にお尋ねください。

北海道における国際協力に関する情報の提供を目的とし、1996年、JICA札幌に図書室が開設されました。

「JICAについて知りたい」、「開発途上国について知りたい」、「国際協力について調べたい」という皆様に応えられるよう、たくさんの図書、映像資料を取り揃えております。また、図書室内で当室所蔵のビデオ、DVDの視聴が可能です。所蔵資料に関するご質問など、どうぞお気軽にお問い合わせください。

JICAの事業紹介ビデオ、教育分野の図書など、一部の資料の貸出を行っております。

貸出対象者：18歳以上の方
（運転免許証等の身分証明書を必ずご持参ください）

貸出期間、冊数：1週間、2点まで

貸出対象ビデオ、図書、毎月の新着図書資料の一覧表をJICA札幌ホームページにて公開しております。

〒003-0026　札幌市白石区本通16丁目南4番25号
TEL：011-866-8306　FAX：011-866-8302
E-mail：jicasic-lib@jica.go.jp
OPEN：月～金 9:30～19:00　土 9:30～16:30
CLOSE：日曜、祝日、年末年始

新着図書資料です

『世界がみえる地図の絵本　第3版』
著者名：デルフ，ブライアン
出版社：あすなろ書房／出版年：2011年

地図の上には有名な建築物や農作物、名所や動物などのイラストがたくさん描かれています。色とりどりで、見るととても楽しい気分になる地図帳です。
1人で見ても楽しいですが、友人や家族と一緒に見ると会話が弾むでしょう。

■お知らせ■　LIBRARY INFORMATIONの掲載は今号をもって終了します。これまでご愛読いただき、ありがとうございました。

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック
（旧 社団法人北方圏センター）

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日：2012年3月6日
TEL.011（221）7840　FAX.011（221）7845　http://www.hiecc.or.jp
E-mail：pbl@hiecc.or.jp（調査研究部）　intc@hiecc.or.jp（国際協力部）
印　刷：岩橋印刷株式会社

北海道の国際協力情報紙
であい
vol.64 2012 SPRING

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック
（旧 社団法人北方圏センター）
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

特集

HIECC事業　高校生が見たベトナム開発教育ファシリテーターと参加する国際協力ツアー

報告Ⅱ

札幌市立稲穂中学校での報告会（1月20日実施）

前号でベトナムでのスタディツアーの概要を紹介した。今号では帰国後、現地での経験や得たことを高校生が自分たちの母校である中学校や在籍している高校で開いた報告会についてまとめてみた。

さらに、北海道教育大学札幌校（札幌市北区あいの里）を訪問して、大学生のゼミメンバーの前でベトナムを訪問しての見聞、感じたことを発表した。発表後、大学生と質疑応答を行い、大学生の勉強のあり方なども学んできた。

「シンチャオ！」（ベトナム語で"こんにちは"の意味）

発表する髙橋のりお君。札幌北斗高校で（10月24日実施）

元気いっぱいの挨拶で報告会がスタート。最初はベトナムの概要についてクイズを入れながら発表した。高校生から「この食べ物は何？」「ベトナムで人気のある日本の漫画は？」と次々と質問が出され、意外な回答には会場はざわつき様々な反応があった。クイズを通して日本との違いだけでなく、似ている部分にもたくさん気付きベトナムがどんな国かイメージを掴んでいった。

次に、現地で感じたことや帰国後に悩み考えたことの話題に移ると会場の雰囲気は一転し、真剣な表情で話しに聞き入っていた。戦争博物館で考えた戦場カメラマンの存在や枯れ葉剤の影響で今も障がいを抱える人たちのこと、元気な子どもたちと過ごした楽しい時間とは裏腹に、背景には想像もできないような辛い過去を背負っていると知った時の衝撃、他にもマングローブの植樹やベトナムの住環境から感じたこと等、高校生が自らの言葉を紡ぎながら滔々と語っていった。

報告会後のアンケートでは「大変な状況を抱えた子どもたちの笑顔を見て自分の悩みが小さく感じた」、「ベトナム戦争の傷跡の話から戦争の残酷さや愚かさに改めて気付いた」など、身近な友達や先輩の発表を通して聞き手側も深く考えるきっかけを作ったようだ。また、同年代の高校生が堂々と発表している姿に「カッコいい！」「わかりやすかった」などの感想も寄せられ、悩みながら何度も発表内容を練り直し作り上げた努力が実り、発表した高校生にとっても大きな自信につながったようだ。

ベトナムのお土産を報告会会場に展示

各会場での「高校生の声」は、後輩や同級生の心にストレートに響き感動を呼び、大人が発する以上の言葉の力で10人の高校生たちが国際協力のすそ野を拡げていった。この流れがさらに続き、世界に架け橋を結ぶ人材をこの事業を通してさらに輩出していきたい。

北海道教育大学で大津教授のゼミ生と意見交換

高校生たちは2月2日の午後、この事業の監修、指導を務める北海道教育大学大津和子教授やそのゼミ生10名が集まる中、見聞したことや感じたことを発表した。

終了後、大学生側から「疑問や感じた事が気持ちをこめて表されて共感できた」、「帰国後にもよく調べていて、練習を重ねた発表なのがわかった」、「疑問点を調べていく態度はこれからの生活に活きてくると思う」、「高校時代にこのような体験ができたのは素晴らしい」などと評価してもらったが、「何かを感じただけで終わらずに、これから何ができるかを考えてほしい」といった意見もあって高校生たちはうなずいていた。それに対して高校生からは「大学生たちが集中して聞いてくれていたので、自分の言葉で語りかけようと思った」、「疑問に思ったことはそのままにせず、自分が納得するまで調べるのは大切だと思った」など、発表をやり遂げての自信が見られた。

また、ゼミ生のひとりが、ベトナムにテーマを求めた卒論のアウトラインを披露し、聞いていた高校生は「同じベトナムのことでも視点が違って、大学生の勉強は凄い。自分も将来そういう風に勉強したい」と感想を述べた。大学生からも高校生の学び考える姿を称えるなど双方からエールが送られていた。

私の国際協力活動日記

第4回

開店したお店の前で。右から2人目が太田さん。

太田　晃資 さん
Café & Bar「ROGA」店主

私は、日系社会青年ボランティアの23回生として、南米パラグアイにあるピラポという場所に2年間お世話になりました。パラグアイは戦後に日本人移住の歴史があり、その移住された方が高齢化を迎えるということで、老人介護の仕組みを作るというのが私の仕事でした。ピラポは人口6,000人でそのうち日本人が1,200人もおり、小さな日本がそこにはありました。一世の方が文化を残していこうと努力されたことで、言葉だけではなく、日本の行事や風習等もそのまま引き継がれていることが多々ありました。そのこともあり、『介護』＝女性・嫁という考えも同時に根付いていたので、男性である私は自分を知っていただくことから活動をスタートさせました。また自分の活動の指標を、クラブ活動などの行事に参加、協力して下さった人数にし、活動への興味や自分達でやっていきたいという意志をみていきたいと考えました。最初は自分に対して、『何しに来たの?!』という反応だったものが、『活動頑張ってるかい?!』にかわり、『私に出来ることあるかい?!』と彼らに変化があらわれ、意志を感じられることができた瞬間は自分の活動の意義を強く実感できるものでした。

帰国した現在、私はCafé&Bar ROGA（ロガ）という小さな店を経営しています。ROGAという名前は現地語であるグァラニー語の『家』という意味をつけさせていただきました。帰国してからお店を開きたいという夢をもっていた私に、一世のおばあちゃんが開拓の一番苦しい時期に『何もないからチャンスなんだよ』と亡くなったおじいちゃんから声をかけてもらったというお話を聞かせてもらい、この店を開店させる最後の勇気をいただきました。現在、家族やスタッフとお店を頑張ることができるのも、ピラポで出会った彼らとの出会いがあったからこそだと強く感じております。ピラポのみなさんに心から感謝。

日系社会青年ボランティア：23回生
派遣国：パラグアイ／職　種：ソーシャルワーカー

「**Café&Bar ROGA（ロガ）**」
札幌市北区北7条西5丁目5　TEL011-299-7559

ピラポの「お達者クラブ」のみなさんと。
手に持っているのは各自が描いた塗り絵作品です。

国際交流 in 積丹

11月19日（土）と20日（日）の2日間、「国際交流in積丹」が開催された。積丹町での国際交流事業は今年で11回目を数え、北海道海外技術研修員や北海道大学留学生など9カ国12名が参加した。

初日は、役場の方の案内で町内を見学し、有名な景勝地である神威岬や島武意海岸を訪れた。当日はあいにくの曇り空だったが、雄大な景色に圧倒され何枚も写真を撮る人の姿も見られた。他には町内の温泉も体験したり、夕食の際には地元の先生のご厚意による日本舞踊を観賞するなど、留学生は真心のおもてなしに感銘しすっかり「積丹ファン」になっていた。

翌日は町内の小中学校5校での学校訪問。留学生は子どもが興味を持てるように写真を多く用いた発表資料を準備したり、民族衣装を着用して自国紹介を行った人もいた。また日本では手に入らないお菓子を持ってきたクラスでは「美味しい!」、「ビミョウ…」等の感想を言いながら大いに盛り上がり、外国のものに直接触れることによってその国を身近に感じる貴重な機会となっていた。子どもたち側も何週間も前からゲームや遊びなどを工夫して準備し、当日、留学生は児童たちと一緒に工作をしたり元気に走り回ったりとまるで子ども時代に戻っていたようだ。楽しい時間はあっという間に過ぎ、帰る時には別れを惜しみ涙する場面もみられた。

「国際交流in積丹」は長い年数をかけて町全体に浸透し、毎年真心で留学生を迎え入れているのが伝わってくる。その気持ちは留学生にも届き、「もう一度子どもたちに会いたい」、「子どもたちの手作りのプレゼントを部屋に飾って宝物にしている」と伝えてくれた留学生もいた。

積丹町の美しい景色、そして人々の優しさや温かさが今年も多くの留学生の心に刻まれたようだ。

地域との交流

札幌国際センター・帯広国際センターの行事から

日本のお正月気分を味わう「新春文化塾」（札幌）

札幌国際センターの研修員40名が、1月28日（土）、「新春文化塾」（9時半開会）に参加した。毎年1月末に、その名の通り、日本のお正月の雰囲気を味わってもらおうと開催されている行事。

戸外はあいにく雪が降ったりやんだり、おまけに寒い日であったが、ぽかぽかの館内では赤や黄色の袢纏を着た研修員たちがカルタ、剣玉、独楽回しなど日本の昔遊びを体験した。ロビーでは目にも鮮やかな「南京玉すだれ」の妙技が披露されたり、「史響会」会員による箏曲の調べが流れ初春の雰囲気であった。お昼前には「本陣太鼓」の雄壮な音が響き渡って、研修員たちは手に手にカメラを構えていた。

お昼はお待ちかねの寿司の実演。市内のケータリング会社の職人さんの握るお寿司に「美味しい」とモザンビークの女性研修員。生ものは食べないと聞く国も多く味見程度につまむだけの研修員もいたが、まぐろとサーモンはほぼ完食状態の人気であった。

帯広の冬を体験ー「おびひろ氷まつり」（帯広）

帯広国際センターの研修員22名が、1月27日（金）、帯広市緑ヶ丘公園一帯で開催された「おびひろ氷まつり」（開催期間：1月27日～29日）に参加した。

帯広3大祭りの一つでもある氷まつりは、今年で49回目を迎え、『愛の国「幸福物語」～ここからはじまる幸福物語～』をメインテーマに、大小の氷雪像や氷彫刻、アイスキャンドルなどで美しく幻想的な世界を作り出していた。

この日の帯広市の最低気温はマイナス22.5℃とこの冬一番の寒さを記録。会場に到着した午後6時頃でも肌を刺すような厳しい寒さの中、休憩所に閉じこもってしまう研修員もいたが、冬の夜空を彩る花火に歓声をあげ、1時間ほどの間思い思いに氷雪像の見物や市民との交流を楽しんでいた。

研修員は、北海道の冬の厳しさとすばらしさを身をもって体験し、日本での良き思い出となった様子であった。

主催：帯広のまつり推進委員会

さっぽろ 元留学生日記

劉　暁娟さん（文学博士）
（北海道大学大学院文学研究科専門研究員
札幌商工会議所付属専門学校講師
富良野市役所嘱託職員）

2011年春、社会人に活動の幅がひろがる

日本の伝統文化の深さを知りたいと思いました

2年前に学生生活を終了し社会人として各方面で活躍している。中国で服飾デザイナーの勉強をしている時に日本の着物に出会って日本の伝統文化に惹かれたという。来日して最初は東京に2年間、続いて富山大学で4年間勉強して、北海道へ。

来日して12年になるという劉さんにとって、日本とは何かをお聞きした。

中国を理解し、中国に理解される北海道に

「長く日本で生活をしていることをよく聞かれますが、私は北海道が好きです。好きな所で暮らすのは幸せなことです」と言う劉さん。その土地や相手のことを考えれば言わざるを得ないこともあります、と時には辛口の発言もいとわない。

小紙「であい」を発行する（公社）北海道国際交流・協力総合センター（HIECC）が2010年に「北海道にとっての国際交流－その意義を問い直す」をテーマに募集した論文に応募、特別賞を受賞した。その中で、「北海道と中華圏の国際交流には双方の文化を理解する人材の育成に取り組むことが必要である」と論旨を展開し、中国と北海道が相互に理解するには、中国文化や中国語の教育が必要と説いている。

「言葉として中国語を学ぶだけではなく、広く中国の経済、文化、歴史・地理、習慣、民族などを知ることで、客観的に中国を認識し、理解が深まります。そして、中国に対する北海道のPR効果もあがります」と日本での様々な体験を通じて感じたことを論文の中で指摘した。

富良野市の嘱託職員として

「富良野市は中国で人気の都市です。どうすれば中国人にいっそう好かれる街になるかと考えています。その点で北海道内では先発の観光地です」。観光地の売り込みに必要なのは、どうすれば好かれるか、にあると強調している。

北海道大学で博士号を取得した。「博士論文のテーマは日本語の動詞につく"…ている"の変化についてです」と専門知識を極めている。これまで中国語の教師、通訳、翻訳などに携わり、現在は週４日富良野市の嘱託職員として観光課に席をおいて中国文化の紹介やセミナー、通訳・翻訳などで活躍している。そのほか札幌商工会議所付属専門学校では例年、4クラス180人ほどの生徒に中国語を教えている。「仕事が楽しくて、すごく生きがいを感じています」。

日本の大学には中国語学科はあっても中国の文化を教える専門的な学校がなく、日中間の相互理解が足りなくて誤解が生じることもあるという。「今後は日本の青少年に専門的に中国の文化と中国語を教える機関を」と展望を抱いている。その願いは、日本と中国の末永く続く真の友好交流にある。

富山大学の卒業に際して